



乎賀源內集

全

昭和九年四月十七日印刷  
昭和九年四月廿一日發行

有朋堂文庫  
平賀源内集  
(非賣品)

編輯者 塚本哲三

東京市淀橋區西大久保町二丁目二百三十六番地

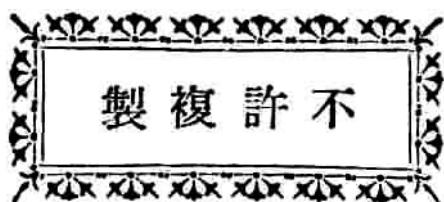
印 刷 者 兼  
印 刷 所  
三 浦 捷 一

東京市神田區錦町一丁目十九番地

印 刷 所  
合資會社 有朋印刷社

東京市神田區錦町三丁目九番地

發行所 有朋堂書店



## 緒 言

本書には平賀源内の述作中最も人口に膾炙せる「風來六々部集」「根南志草」「風流志道軒傳」「そしり草」「神靈矢口渡」の五篇を萃めたり。

源内は讃岐の人、幼より奇行多く、深く志を皇典と本草の學とに潛め、賀茂眞淵、田村藍水等に師事せしが、後長崎に出でて唐人館に出入し、輸入藥物の眞偽を判する傍、和蘭譯官につきて蘭語を究め、博物學上の智識を得たる事妙なからず。後去りて大阪に往き、豪商中島屋喜四郎の爲めに甘蔗の栽培を教へ、更に諸國を歴遊して寶曆中江戸に出でたり。

源内天賦の英才は向ふ所として可ならざるなく、殊に其發明的天才と科學的頭腦とは、當時全く他に其匹を見ざる所なりしかども、その説く所高遠に過ぎて世の君主に用ひられず、殊に傲岸不羈なる彼の性格は世の滔々者流と合ふ能はずして、麒麟空しく槽櫪の間に老ゆるに至れり。彼や元より君子の器にあらず、我が意我が説の遂に世に容れられざるを見るや、頽然自ら棄てて酒を使ひ色に耽り、放言大語世の人士を痛罵して快しとせり。彼が文

筆に隠れて幾多の狂文戯作を出し、徳川文學中の一異彩として其名却つて文界に不朽なるを致せるもの、蓋し亦彼が不遇不滿の結果たらすんばあらず。文に激越の調多きは、元より其所といふべし。鳩溪を以て號とし、戯作の書には天竺浪人、松籟子、風來散人、森羅萬象翁、無根叟、福内鬼外等といへり。安永八年寄宿生東天紅の誤つて人を殺すに坐し、傳馬町の獄に繋がれ、其十二月十八日瘡を痛みて獄裏に死すといふ。彼の最後につきては尙一二異説の存するあれども、未だ其何れか眞なるを知らず。

•••••  
風來六々部集は彼が狂文の集にして、前後兩篇共に各六部の文を集めたるを以てこの名あり。其前篇中になえまらいんいつでん瘦陰隱逸傳と稱する一篇あり、事を男根の説に托して、世を罵る所、亦好箇の快文字なれども、其措辭概ね陰部の事に屬し、善良の風俗を亂すの懼なきにあらねば、今只其篇名と題辭とのみを止めて、全文を抹消する事となしたり。

•••••  
根南志草は一篇の架空的小説にして、閻魔大王が名優瀬川菊之丞を戀ひて之を地獄に捉し來らんとし、幾多の苦計を弄する次第を骨子として、専ら男色の様を寫したるもの也。

風流志道軒傳は淺之進といへる稚兒が風來仙人と號する仙術者に如意自在なる一葉の團扇を授けられ、其徳によりて世界各國を飛行し、或は支那の後宮に忍び入りて官女と通じ、或は女護島に漂流して男郎屋を開始する時、幾多の狂態を演じての後、再び仙人の戒を受けて、志道軒と號し、淺草觀音の地内に机を据ゑ、木の松茸を以て面白をかしく群集に説話するに至る迄の、一篇の架空小説にして、最もよく源内の抱負と性格とを窺ふべきもの也。

そしり草は史上に有名なる幾多の人物を捉し來りて批評を下せる一家言にして、また痛快の文字たるを失はざれども、其言ふ所概ね淺薄にして、其文致又上乘といふべからず、或は後人の名を源内に假れるものなるべきか。帝國圖書館所藏の寫本には、奥に、

此書溪翁の戯作にて祕置也、一世の後枕中にありしを予請得て祕せること久しう、依て後記す、萬象述。

と明記すれども、未だ遽かに信すべからず。今は其源内作として人口に膾炙せるの故を以

て、姑く考證を経ずして之を本書中に採録したるのみ。此書寫本として行はれ、版本の信據すべきものあるを見ず。依て帝國文庫本に參看するに帝國圖書館本その他一二三の寫本を以てし、語句の最も宜しと認むるもの擇みたれども、魯魚の誤と誤脱錯簡との甚しきものあるが如く、文の疑はしき所なほ少なからず。

神靈矢口渡は明和七年作の淨瑠璃にして、材を新田義興・義岑兄弟に取り、兵庫之助、南瀬六郎等の忠節を配して、最も悲壯を極めたるもの也。淨瑠璃には外に「源氏大草紙」「歎案わがは葉相生源氏」「前太平記古跡鑑」等の作あり、寔に江戸作者の棟梁として推すべし。

校訂に關する一般方針は他の本文庫と異なる事なく、その校訂校正に當りては、古賀友太、星野亮太郎二氏を煩はしたる所多し。記して謝意を表す。

大正四年六月

校訂者 塚 本 哲 三

平賀源内集 目錄

風來六々部集	前編	一一七
放屁論	.....	五
放屁論後編	.....	三
「追加」	.....	元
婆陰隱逸傳	.....	三
阿千代之傳	.....	三
蛇蛻青大通	.....	三
力婦傳	.....	至
風來六々部集 後編		
吉原里のをだ巻評	細見	七五——一五二
飛だ噂の評	.....	八九
天狗觸髣鑒定縁起	.....	七七
飛花落葉	.....	一〇九——一三六

江戸男色細見序

長枕禰合戰後序·····二七

神靈矢口渡跋

嫩葉相生源氏後序

おひるみづきもと

流飲酒論

後日 荒御靈菴田神德口上

同上  
卷之三

青霞集卷之三

本居宣長著

「通言」吉原細見天の浮橋序

足樹之辨

光鳴浮御江戸序

卷之三

志具佐

前編三之卷	一七三
前編四之卷	一八四
前編五之卷	一九六
後編一之卷	二〇五
後編二之卷	二二七
後編三之卷	二三二
後編四之卷	二四五
後編五之卷	二五五
風流志道軒傳	二七七—三四四
卷之一	二八二
卷之二	二九三
卷之三	三〇四
卷之四	三一四
卷之五	三二七

そ  
し  
り  
草

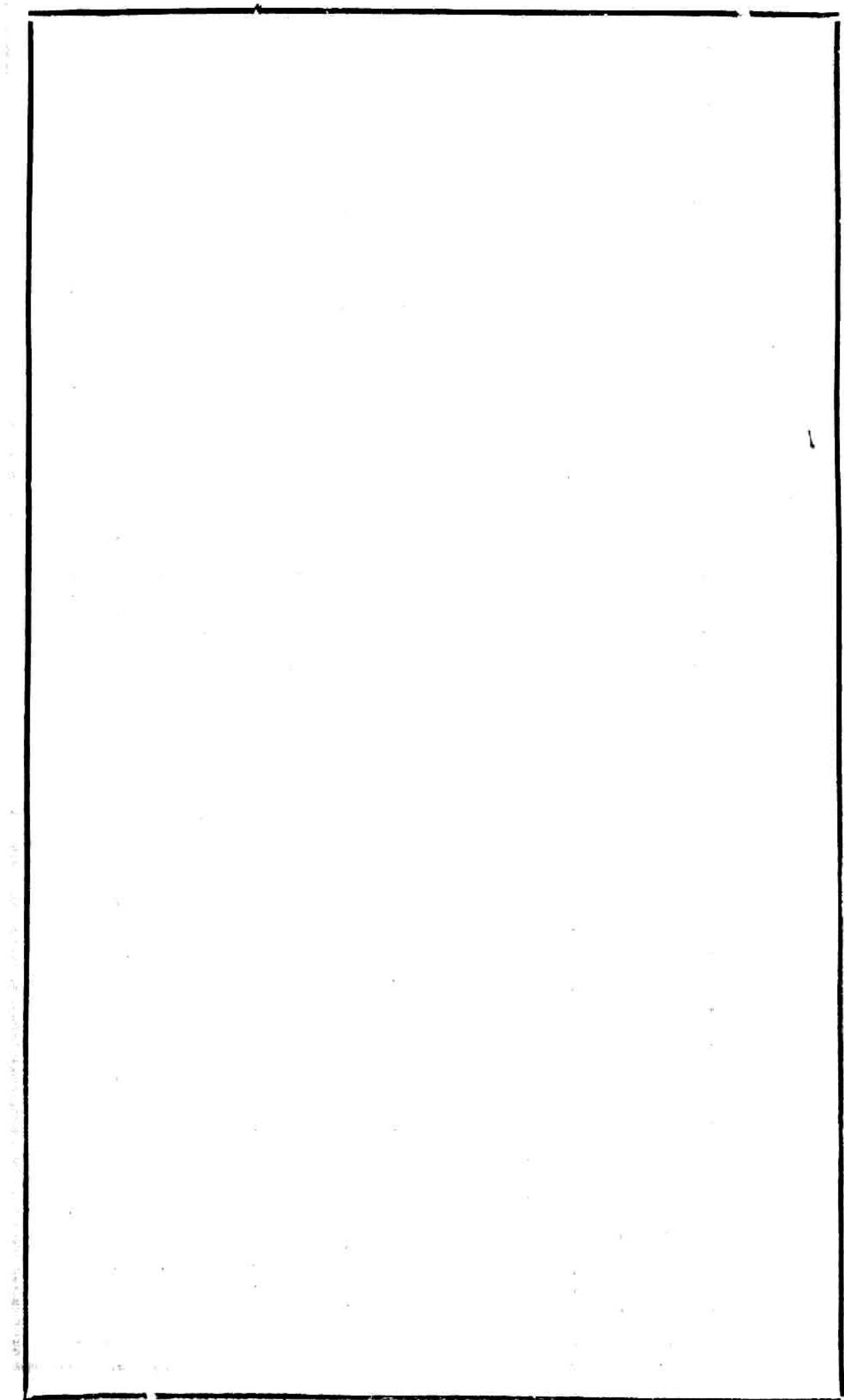
(一) 守屋	三四五
(二) 聖德太子	三四八
(三) 光明皇后	三四九
(四) 玄昉	三五〇
(五) 弘法	三五三
(六) 真濟	三四四
(七) 朝觀	三五四
(八) 淨藏	三五六
(九) 道命	三五七
(十) 業平	三五九
(十一) 紫式部	三六三
(十二) 神崎遊女	三六五
(十三) 玄賓	三六七
(十四) 遍照	三六九
(十五) 喜撰	三七一

(十六)能	因	三七一
(十七)日	藏	三七二
(十八)慈	心	三七三
(十九)賴	豪	三七四
(二十)西	行	三七五
(廿一)文	覺	三七六
(廿二)蓮	生	三七七
(廿三)長	明	三七八
(廿四)圓	觀	三七九
(廿五)兼	好	三七一〇
(廿六)賴	政	三七一
(廿七)重	盛	三七二
(廿八)賴	朝	三七三
(廿九)義	經	三七四
(三十)時	政	三七五
(卅一)泰	時	三七六
(卅二)時	賴	三七七

神靈矢口渡	四六三—五五〇
第一	四五三
第二	四五八
第三	四五八
第四道行比翼の袖	五三
第五	五四八
第六	四九八
第七	四九八
第八	四九八
第九	四九八
第十	四九八
第十一	四九八
第十二	四九八
第十三	四九八
第十四	四九八
第十五	四九八
第十六	四九八
第十七	四九八
第十八	四九八
第十九	四九八
第二十	四九八
第二十一	四九八
第二十二	四九八
第二十三	四九八
第二十四	四九八
第二十五	四九八
第二十六	四九八
第二十七	四九八
第二十八	四九八
第二十九	四九八
第三十	四九八
第三十一	四九八
第三十二	四九八
第三十三	四九八
第三十四	四九八
第三十五	四九八
第三十六	四九八
第三十七	四九八
第三十八	四九八
第三十九	四九八
第四十	四九八
第四十一	四九八
第四十二	四九八
第四十三	四九八
第四十四	四九八
第四十五	四九八
第四十六	四九八
第四十七	四九八
第四十八	四九八
第四十九	四九八
第五十	四九八
第五十一	四九八
第五十二	四九八
第五十三	四九八
第五十四	四九八
第五十五	四九八
第五十六	四九八
第五十七	四九八
第五十八	四九八
第五十九	四九八
第六十	四九八
第六十一	四九八
第六十二	四九八
第六十三	四九八
第六十四	四九八
第六十五	四九八
第六十六	四九八
第六十七	四九八
第六十八	四九八
第六十九	四九八
第七十	四九八
第七十一	四九八
第七十二	四九八
第七十三	四九八
第七十四	四九八
第七十五	四九八
第七十六	四九八
第七十七	四九八
第七十八	四九八
第七十九	四九八
第八十	四九八
第八十一	四九八
第八十二	四九八
第八十三	四九八
第八十四	四九八
第八十五	四九八
第八十六	四九八
第八十七	四九八
第八十八	四九八
第八十九	四九八
第九十	四九八
第九十一	四九八
第九十二	四九八
第九十三	四九八
第九十四	四九八
第九十五	四九八
第九十六	四九八
第九十七	四九八
第九十八	四九八
第九十九	四九八
第一百	四九八

目  
錄

四



放屁論 同後篇

瘞陰隱逸傳

力婦傳 蛇蛻青大通 於千代傳

# 風來六々部集

前編

風來先生書捨て給ひし反古を太平館主人拾集めて六部集といふ其言意外に出て一家の文法古今獨歩といふべし今に至りても我人共に見んことをほりすしかるにかの集はやくより世にともしくなりもて行くまことにこたび櫻木に彫り猶殘れる花をもあつめて六部を増補し前後四卷となし六々部集とはなりぬ

餘貨樓銅多言

## 風來六部集序

時に遇はざれば孔子もお茶を引きたまひ、管仲が鞍替も能い所へ乗込めば、桓公の揚詰と成つて遂に齊國のおいらんとなる。予が先師風來山人、宿昔青雲の梯を踏失して、天竺浪人と成りしより、滄浪の水繆に濁醪の世の醉を醒し、吐散したる酒反吐は、醉うた浮世に廻さるよ、醉潰共に目を明す、太平樂の卷物を、縞の本に書きつどめ、世に行はるよ物六巻あり。頃日書林太平館、其小冊にして讀足らず、且ちよほくさと數多きは、回覽するの煩はしきを厭ひ、六部を合して二巻となし、是を號けて風來六部集と題す。全く殘口が無駄書を八部せんとするには非ず、唯是會刻の六部に御放施。

于時安永九年五月十八日下界隱士天竺老人頼みもせぬに筆を探る。



おとこ男



放屁論自序

屁てふもののある故に、への字も何とやらをかしけれど、天に霹靂あり、神に幣帛あり、鷹に經緒有り、船に舷あり、草に女青あり、虫に氣鑿あり、狐鼴鼠の最後屁は、一生懸命の敵を防ぐ。人として放らずんば、獸にだも如かざるべけんや。放つたり臭いだり屁たる君子ありといへば、強ちこれを譏しむべからず。今評判の撒棄漢論より證據兩國橋。

# 放屁論

人參吞んで縊る癱漢あれば、河豚汁喰うて長壽する男もあり。一度で父なし子孕む下女あれば、毎晩夜鷹買うて鼻の無事なる奴あり。大そうなれど嗚呼天歟命歟。又物の流行と不流行も、時の仕合不仕合歟、又は趣向の善惡によるならんか。柏庭が氣どり、慶子が所作事、仲藏が功者、金作が愛敬、廣治が調子、三五郎がしこなし、梅幸浪花をひしけば、富三東都に名を顯し、川口の參詣、淺草の群集、深川の角力、吉原の俄、沙洲は木挽町に河東節の根本を弘むれば、住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る。或は機關、子供狂言、身ぶり聲色辻談議、今にはじめぬお江戸の繁榮、其品數へ盡しがたき中に、さいつ頃より、兩國橋の邊に放屁男出でたりとて、評議とりぐく町々の風説なり。それ熟惟みれば、人は小天地なれば、天地に雷あり人に屁あり、陰陽相激するの聲にして、時に發し時に撒ること持まへなれ。いかなれば彼男、昔よりいひ傳へし階子宗數珠積はいふもさらなり、礎すががき二番叟、三ツ地ヒ艸祇園囃、犬の吠聲鶴鳴、花火の響は兩國を欺き、水車の音は淀川に擬す。道成寺、菊慈童はうた、めりやす、